

論文

青年初期における自己認知の発達に関する横断的研究
—自尊感情、コンピテンス、重要度評価の観点から—

八島 猛*・大庭 重治*・葉石 光一**・池田 吉史*

青年初期における自己認知の発達と重要度評価の機能について検討することを目的として、小学5年生から中学2年生までの児童生徒を対象に横断的調査を実施した。その結果、自己認知の発達の傾向として、児童生徒は5領域の有能性や適切性、すなわちコンピテンスを弁別して認知することが可能であること、この時期において、自尊感情については、ほとんど変動しないこと、コンピテンスについては、学年進行に伴い低下し続ける領域(学業)、ほとんど変動しない領域(友人、運動、外見)、上昇する領域(行動)があること、重要度評価については、ほとんど変動しない領域(学業、友人、運動、行動)、学年進行に伴い上昇する領域(外見)があることを示唆する結果が得られた。重要度評価の機能については、概して自尊感情と直接的な関連性は認められないものの、自尊感情とコンピテンスとの関連性を調節する機能があることを示唆する結果が得られた。

キーワード：自尊感情 コンピテンス 重要度評価 青年初期 児童生徒

I. 問題と目的

児童生徒における抑うつ傾向や不登校の増大といったところの問題が顕在化するに従い、精神的健康の指標あるいは抑うつに対して低減効果が期待される自尊感情という概念が注目されている(たとえば、Sharma & Agarwala, 2013)。

Harter (1999) は自尊感情の生涯にわたる発達プロセス研究に基づいて、青年初期(early adolescence)における自尊感情の変動要因に関して重要な知見を提供している。Harter (1999) によれば、自尊感情、コンピテンス、重要度評価は動機づけや情動にかかわる自己認知の中核的な構成要素である。自尊感情とは、自己全体に対する肯定的/否定的な評価であり、コンピテンスとは、特定領域の自己に対する有能性や適切性の評価である。環境との相互作用によって蓄積された様々な領域のコンピテンスが、自尊感情の変動に影響を及ぼす。しかしながら、すべての領域のコンピテンスが、等しく自尊感情に影響を及ぼすというわけではない。個人にとって重要性が高い領域、すなわち、重要度評価が高い領域のコンピテンスほど影響力は大きい。また、重要度評価が高い領域における肯定的なコンピテンスは自尊感情を維持・改善する方向に作用し、重要度評価が高い領域における否定的なコンピテンスは自尊感情を減損させる方向に作用する。つまり重要度評価とコンピテンスとの関連性が自尊感情の変動に寄与するのである。

従来、青年初期の児童生徒を対象とした自己認知に関する国内研究は、そのほとんどが自尊感情とコンピテンスとの関連性に焦点化しており、重要度評価を含めて検討した研究は少ない(藤崎, 1999; 太田, 2007)。その背景には、児童生徒の得意な側面を伸ばす、あるいは、スキルの獲得を重視するという教育事情が影響しているといえる。

青年初期は、認知面における質的な変化が生じる時期であり、環境の著しい変化を経験する時期でもある。したがって、自尊感情、コンピテンス、重要度評価は大きく変動することが予測される。実際、「できること」と「重要なこと」は小学校低学年において既に区別が可能であり、小学校5年生以降、安定した自己を維持する上で、個人的重要性の影響が強くなることが明らかにされている(Eccles, Adler, Futterman, Goff, Kaczala, Meece, & Midgley, 1983)。この時期における自己認知の発達の傾向を重要度評価も含めて検討することにより、自尊感情の変動要因をコンピテンスとの関連性からのみならず、個人の価値観を直接的に反映する重要度評価との関連性から解明し得る可能性がある。

また、疾患や障害があるために、特定の領域におけるコンピテンスの維持・改善が難しい児童生徒が存在する。こうした児童生徒の自尊感情に対する教育的対応として、個人の能力や適切性を反映するコンピテンスのみならず、個人の価値観にも注目することの意義と根拠を提案することが重要である。

そこで、本研究では、小学5年生から中学2年生までの児童生徒を対象として横断的調査を行い、自尊感情、コンピテンス、重要度評価の学年差と性差及びこれらの関連性を明らかにして、自己認知の発達の傾向と重要度評価の機能について検討することを目的とした。

II. 方法

1. 調査内容

Harter(1985)のSelf-Perception Profile for Children (SPPC)の邦訳版である自己概念尺度(前田, 1998)を一部変更して作成した自己認知尺度を使用した。自己認知尺度は、自尊感情下位尺度(6項目)、学業、友人、運動、外見、行動の5領域のコンピテンス下位尺度(各6項目)、同5領域の重要度評価下位尺

* 上越教育大学臨床・健康教育学系

** 埼玉大学教育学部

度（各2項目）の全46項目から構成されている。

自己概念尺度からの変更点は以下の3点である。第1に、回答の利便性を考慮し、回答方式を「あてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法に変更した。その際、項目表現を肯定的表現と否定的表現が半数となるように配置した。第2に、自己概念尺度には重要度を評価する項目はなく、本邦において重要度評価項目の妥当性について検討した研究はない。そこで、Harter (1985) に倣い各領域のコンピテンス下位尺度を構成する項目の中から、各領域2項目ずつ、合計10項目を抽出して、その項目の重要度を尋ねる項目（たとえば、「勉強が得意なことはとても大切だ」）を作成して追加した。回答方式はコンピテンス下位尺度と同様に「あてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法とした。第3に、慢性疾患のある小学4年生、小学5年生、中学1年生各1名に対して暫定版の自己認知尺度を実施し、わかりにくいとの指摘があった項目表現を若干修正した。慢性疾患のある児童生徒に依頼した理由は、今後この尺度を病弱者に適用することを念頭にしているためである。その上で、特別支援学校教諭、小学校教諭、中学校教諭、障害児心理学を専門とする大学教員各1名に項目表現の適切性を評価してもらい、内容に問題がないことを確認した。自己認知尺度の表紙に学年と性別を尋ねるフェイスシートを加えて本研究の質問紙として使用した。

2. 調査対象及び手続き

人口約20万人の地方都市にある同一小学校に在籍する小学5年生から小学6年生までの児童153名（小学5年生76名、小学6年生77名）、同一中学校に在籍する中学1年生から中学2年生までの生徒185名（中学1年生90名、中学2年生95名）の合計338名を対象とした。

調査は201X年1月～3月（3学期）の期間に、対象者の所属する学校にてクラス単位で実施した。各学級の担任教師に、質問紙とともに研究者が作成した回答マニュアルを配布してもらい、対象者はこれをもとに個人のペースで回答した。

3. 変数の処理

(1) 項目得点

自尊感情下位尺度とコンピテンス下位尺度の各項目に対して、自己を肯定的に認知しているほど得点が高くなるように、また重要度評価下位尺度の各項目に対して、重要度を高く認知しているほど得点が高くなるように、逆転項目の処理を行い4～1点を与えて、項目得点とした。

(2) 下位尺度得点

自己認知下位尺度を構成する各項目の得点平均値を算出し、自尊感情得点、各領域のコンピテンス得点、各領域の重要度評価得点とした。

(3) 重要な領域におけるコンピテンス得点と重要でない領域におけるコンピテンス得点

Harter (1999) に倣い、重要度評価得点が3点以上の領域におけるコンピテンス得点の平均値を算出し、これを重要な領域におけるコンピテンス得点（重要領域コンピテンス得点）とした。また、重要度評価得点が3点未満の領域におけるコンピテ

ンス得点の平均値を算出し、これを重要でない領域におけるコンピテンス得点（非重要領域コンピテンス得点）とした。例えば、ある対象において、学業領域と友人領域の重要度評価得点がいずれも3点以上であって、運動領域、外見領域、行動領域の重要度評価得点が3点未満であるとするならば、重要領域コンピテンス得点は学業領域と友人領域のコンピテンス得点の平均値となり、非重要領域コンピテンス得点は運動領域、外見領域、行動領域のコンピテンス得点の平均値となる。なお、重要度評価得点が3点以上（または、3点未満）となる領域がない場合には、重要領域コンピテンス得点（または、非重要領域コンピテンス得点）は0点となるため、重要領域コンピテンス得点（または、非重要領域コンピテンス得点）は0～4点の得点範囲となる。

4. 倫理的配慮

対象者に対して調査依頼文を配布した。依頼文には、平易な文章で「調査の目的」「調査への協力は自由意志であること」「協力できない場合でも不利益がないこと」を明記した。なお、本研究は、国立大学法人上越教育大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号:43）を得て実施した。

III. 結果

誤反応のない有効回答者数（有効回答率）は338名中286名（84.6%）であった。学年別では、小学5年生で76名中65名（85.5%）、小学6年生で77名中66名（85.7%）、中学1年生で90名中74名（82.2%）、中学2年生で95名中81名（85.3%）であった。

1. コンピテンス下位尺度の因子構造と自己認知尺度の信頼性

対象者におけるコンピテンス5領域の弁別可能性を確認するために、コンピテンス下位尺度を構成する30項目に対して固有値1.0以上を基準として因子分析を実施した。その結果、6因子構造を示唆する結果が得られた。そこで、6因子構造を仮定して、重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を実施した（表1）。

第1因子、第2因子、第4因子はSPPCと同じ各6項目によって構成されており、順に運動領域、友人領域、学業領域に該当する因子であると考えられた。第3因子はSPPCにおいて外見領域を構成する5項目と行動領域を構成する1項目の合計6項目から構成されており、ほぼ外見領域に該当する因子であると考えられた。第5因子はSPPCにおいて行動領域を構成する3項目と外見領域を構成する1項目の合計4項目から構成されており、ほぼ行動領域の因子であると考えられた。第6因子はSPPCにおいて行動領域を構成する2項目、その中でも否定的表現（逆転項目）の項目から構成されており、行動領域における否定的側面の因子であると考えられた。続いて因子負荷量が.40未満の項目、複数の因子に同程度の負荷量を示す項目、3未満の項目で独立した因子を構成する項目の3点を項目削除の基準として因子分析を繰り返したところ、No.4、No.5、No.15、No.23、No.29、No.34の6項目が削除され、SPPCに想定された

とおり5因子構造が得られた。

信頼性を確認するために、コンピテンス下位尺度を構成する項目及び自尊感情下位尺度を構成する項目について、クロンバックの α 係数を算出した。項目削除後のクロンバックの α 係数は、学業領域 .79、友人領域 .80、運動領域 .84、外見領域 .77、行動領域 .59であり、自尊感情下位尺度項目におけるクロンバックの α 係数は .79であった。

次に、SPPCによって想定された尺度構成に基づき、項目を

削除しないで各下位尺度項目におけるクロンバックの α 係数を算出した。その結果、学業領域 .79、友人領域 .80、運動領域 .83、外見領域 .81、行動領域 .65となり、項目削除後の α 係数と比較して、運動領域はわずかに低下するものの、外見領域と行動領域は高い値を示すことが確認された。以上の結果と、今後の研究において児童生徒の自己認知を継続的に測定することを念頭に、以降の分析は項目を削除せず、SPPCの尺度構成に基づいて進めることにした。

表1 コンピテンス下位尺度に対する因子分析（重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転）の結果

No.	領域	項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
3	運動	どんなスポーツでもうまくできる	.78	-.09	.08	-.06	.29	.01	.73
21	運動	クラスの友だちよりもスポーツができる	.76	-.01	-.01	-.08	.29	-.09	.74
27	運動	スポーツはするより見ているほうがよい (R)	.70	-.02	.00	.03	-.13	-.03	.47
9	運動	スポーツがあるていどできる	.66	.10	-.04	.07	.08	-.08	.54
33	運動	はじめてするスポーツはうまくできない (R)	.63	.00	.04	.07	-.12	.04	.41
15	運動	これまでにしたことのないスポーツはしたくない (R)	.52	.08	-.05	.10	-.18	.07	.33
8	友人	友だちがすくない (R)	.04	.87	.06	-.03	-.25	.06	.77
20	友人	いつもたくさんの友だちといっしょにいる	.10	.76	-.03	-.14	.10	-.03	.63
14	友人	あるていど友だちがいる	-.10	.59	-.09	.11	.03	.01	.33
2	友人	あたらしい友だちをつくるのがにがてだ (R)	.20	.57	.00	.02	-.13	.00	.44
26	友人	クラスのたくさんの友だちからすかされている	-.08	.54	.01	.13	.38	-.04	.58
32	友人	友だちからあまり人気がない (R)	-.08	.50	.19	-.02	.07	.03	.34
22	外見	自分の見た目が気にいらぬ (R)	-.02	-.04	.83	.11	-.05	.03	.71
28	外見	自分の顔やかみの毛が気にいらぬ (R)	.07	-.03	.71	.04	-.06	.13	.53
16	外見	自分のからだつきが気にいらぬ (R)	.06	.08	.63	.01	-.14	-.06	.42
10	外見	自分の身長と体重が気にいっている	-.03	-.01	.45	-.10	.21	-.21	.34
34	外見	顔がよい	-.08	-.02	.42	.01	.38	-.06	.41
5	行動	自分のおこないが気に入らない (R)	-.02	.12	.35	-.05	.14	.21	.34
31	学業	じゅぎょうがよくわからない (R)	.12	-.05	.02	.79	-.17	.02	.60
1	学業	べんきょうがとてんどくだ	-.03	-.03	.01	.72	.24	-.07	.67
19	学業	習ったことをすぐにわすれる (R)	.02	-.02	.21	.58	-.06	.21	.50
7	学業	クラスの友だちと同じくらい頭がよい	-.13	.10	-.10	.55	.31	-.11	.50
25	学業	じゅぎょう中に問題やしつもんこたえられる	.08	-.01	-.02	.50	.14	-.28	.41
13	学業	宿題を終わらせるのにとても時間がかかる (R)	.08	.07	-.04	.42	.04	.16	.25
11	行動	いつも正しいことをする	.04	-.09	-.02	-.03	.72	.41	.47
35	行動	おぎょうぎがよい	.04	-.12	-.08	.10	.65	.22	.38
17	行動	ほかの人の期待どおりに行動する	.00	.15	-.09	.02	.48	.21	.26
4	外見	自分のスタイルが気にいっている	-.05	-.01	.36	-.08	.42	-.10	.39
29	行動	してはいけないことをする (R)	.03	-.01	.00	-.01	.30	.80	.59
23	行動	いつも問題をおこす (R)	-.09	.07	.02	.00	.38	.65	.44
			因子寄与率	20.10	8.12	5.77	4.87	4.84	4.24
			累積寄与率	20.10	28.22	33.98	38.85	43.69	47.93
			F1	—	.39	.27	.18	.18	-.02
			F2		—	.31	.28	.25	.07
			F3			—	.35	.32	-.03
			F4				—	.28	.03
			F5					—	-.30
			F6						—

注：表中の「No.」は項目番号を、「領域」はSPPCに想定された項目の含まれる領域を、「(R)」は逆転項目を示す。ゴシック体の数値は因子負荷量が .40以上を示す。

2. 自己認知の学年差と性差

自己認知における学年と性の量的差異を明らかにするために、自尊感情得点、5領域のコンピテンス得点（学業、友人、運動、外見、行動）、同5領域の重要度評価得点、重要領域コンピテンス得点、非重要領域コンピテンス得点を算出してこれらを従属変数とし、学年（4）と性（2）を独立変数とする多変量分散分析を実施した（表2、表3）。

その結果、学年と性の交互作用は、いずれの変数においても認められなかった。学年の主効果は、学業コンピテンス、行動コンピテンス、外見重要度評価、非重要領域コンピテンスに認められた。Bonferroni法による多重比較の結果、学業コンピテンスは小学6年生が中学2年生よりも有意に高かった（ $p < .01$ ）。行動コンピテンスは、中学1年生が小学5年生よりも有意に高く（ $p < .05$ ）、中学2年生が小学5、6年生よりも有意に高かった（いずれも、 $p < .01$ ）。外見重要度評価は、中学2年生が小学5、6年生よりも有意に高かった（いずれも、 $p < .05$ ）。非重要領域コンピテンスは小学5年生が中学2年生よりも高い傾向にあった（ $p = .06$ ）。

つまり、青年初期において自尊感情は変動しないこと、コンピテンスについては、学年進行に伴い低下し続ける領域（学業）、変動しない領域（友人、運動、外見）、上昇する領域（行動）があること、重要度評価については、変動しない領域（学業、

友人、運動、行動）、学年進行に伴い上昇する領域（外見）があることを示唆する結果が得られた。

性の主効果は、運動コンピテンス、外見コンピテンス、運動重要度評価に認められ、いずれも男性が女性よりも有意に高かった（いずれも、 $p < .01$ ）。つまり、この時期のコンピテンスと重要度評価には、性差があることを示唆する結果が得られた。

3. 自尊感情とコンピテンス、重要度評価との関連性

自尊感情と5領域のコンピテンス、5領域の重要度評価との関連性を学年と性の観点から明らかにするために相関分析を実施した（表4）。その結果、学年別にみると、自尊感情との間に有意な相関関係がみられたコンピテンスと重要度評価の領域は、小学5年生において友人、外見、行動コンピテンス、小学6年生において学業、友人、外見コンピテンス、中学1年生において学業、友人、運動、外見、行動コンピテンス及び学業、友人、外見、行動重要度評価、中学2年生において学業、外見、行動コンピテンスであった。つまり、自尊感情と各領域のコンピテンスとの間には、概して正の関連性が認められるが、自尊感情と各領域の重要度評価との間にはほとんど関連性がないことを示唆する結果が得られた。一方、中学1年生は、自尊感情と重要度評価との間に運動領域を除く4領域において正の関連性が認められ、他の学年とは異なる様相を示すことが明らかに

表2 自己認知下位尺度得点の平均値と標準偏差及び分散分析の結果

属性(n)\領域		学業	友人	運動	外見	行動	自尊感情
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
コンピテンス							
小学5年生	男性(25)	2.67 (.70)	3.26 (.39)	2.71 (.77)	2.55 (.47)	2.43 (.53)	2.63 (.52)
	女性(40)	2.59 (.58)	2.86 (.69)	2.28 (.67)	2.25 (.60)	2.50 (.47)	2.54 (.68)
小学6年生	男性(31)	2.72 (.57)	3.06 (.54)	2.82 (.56)	2.56 (.56)	2.51 (.45)	2.57 (.54)
	女性(35)	2.65 (.51)	3.00 (.52)	2.48 (.66)	2.35 (.60)	2.51 (.44)	2.65 (.66)
中学1年生	男性(35)	2.60 (.64)	2.86 (.70)	2.56 (.72)	2.54 (.51)	2.69 (.54)	2.70 (.54)
	女性(39)	2.38 (.68)	2.83 (.66)	2.26 (.75)	2.12 (.62)	2.74 (.48)	2.63 (.56)
中学2年生	男性(45)	2.32 (.65)	2.85 (.60)	2.61 (.72)	2.30 (.59)	2.80 (.51)	2.47 (.58)
	女性(36)	2.39 (.64)	3.00 (.57)	2.42 (.69)	2.14 (.58)	2.83 (.50)	2.62 (.54)
F値	学年	4.07 **	1.82	1.41	2.32	8.12 **	.58
	性	1.03	1.37	14.55 **	15.64 **	.38	.07
	交互作用	.72	2.51	.38	.68	.05	.71
重要度評価							
小学5年生	男性	3.20 (.72)	3.34 (.61)	3.24 (.83)	2.38 (.97)	3.52 (.60)	
	女性	3.26 (.82)	3.34 (.78)	3.05 (.99)	2.43 (1.02)	3.54 (.60)	
小学6年生	男性	3.34 (.60)	3.47 (.52)	3.42 (.74)	2.29 (.73)	3.52 (.54)	
	女性	3.40 (.75)	3.34 (.51)	3.04 (.95)	2.60 (.68)	3.47 (.70)	
中学1年生	男性	3.04 (.75)	3.21 (.78)	3.24 (.87)	2.36 (.88)	3.31 (.70)	
	女性	3.31 (.73)	3.18 (.69)	2.81 (.91)	2.73 (.77)	3.64 (.41)	
中学2年生	男性	3.38 (.61)	3.24 (.79)	3.17 (.79)	2.83 (.74)	3.48 (.57)	
	女性	3.13 (.74)	3.10 (.81)	2.85 (.80)	2.83 (.70)	3.53 (.66)	
F値	学年	.88	1.79	1.04	4.19 **	.08	
	性	.16	.84	10.11 **	3.48	1.46	
	交互作用	1.71	.17	.24	.95	1.32	

** $p < .01$

表3 重要領域コンピテンス得点、非重要領域コンピテンス得点の平均値と標準偏差及び分散分析の結果

属性(n) \	重要領域コンピテンス		非重要領域コンピテンス	
		M (SD)		M (SD)
小学5年生	男性(25)	2.74 (.52)	2.31 (1.04)	
	女性(40)	2.51 (.57)	1.81 (1.02)	
小学6年生	男性(31)	2.78 (.38)	2.13 (1.04)	
	女性(35)	2.72 (.34)	1.69 (1.10)	
中学1年生	男性(35)	2.65 (.67)	1.78 (1.15)	
	女性(39)	2.59 (.41)	1.51 (1.05)	
中学2年生	男性(45)	2.50 (.79)	1.40 (1.18)	
	女性(36)	2.63 (.49)	1.71 (1.17)	
F値	学年	1.37	3.15 *	
	性	.78	2.87	
	交互作用	1.26	2.12	

* $p < .05$

注: 重要領域コンピテンス得点と非重要領域得点の得点範囲は0~4点である。これは、重要度評価得点が3点以上(または3点未満)となる領域がない場合には、重要領域コンピテンス得点(または非重要領域コンピテンス得点)は0点となるためである。

なった。

性別にみると、自尊感情との間に相関関係が認められたコンピテンスと重要度評価の領域は、男性において学業、友人、外見、行動コンピテンス及び外見重要度評価、女性において学業、友人、外見、行動コンピテンスであった。つまり、男性、女性ともに運動領域以外の4領域のコンピテンスとの間に正の関連性が認められ、男性においてのみ、外見重要度評価との間に正の関連性が認められた。

4. 自尊感情と重要領域コンピテンス、非重要領域コンピテンスとの関連性

自尊感情と重要領域コンピテンス、非重要領域コンピテンスとの関連性を学年と性の観点から明らかにするために、相関分析を実施した(表5)。

その結果、自尊感情と重要領域コンピテンスとの間に、小学6年生、中学1年生、中学2年生及び男性、女性において有意な正の相関関係が認められた。一方、自尊感情と非重要領域コンピテンスとの間には、いずれの学年と性においても有意な相関関係は認められなかった。

つまり、小学6年生以降において、自尊感情は個人にとって重要な領域におけるコンピテンスと正の関連性が認められるようになるが、重要でない領域におけるコンピテンスとの関連性は学年と性にかかわらず認められないことが明らかになった。

IV. 考察

本研究では、小学5年生から中学2年生の児童生徒を対象として横断的調査を実施し、自己認知の学年差と性差及び自尊感情、コンピテンス、重要度評価の関連性を分析した。得られた

表4 自尊感情とコンピテンス、重要度評価との相関分析の結果

属性(n) \ 領域	学業	友人	運動	外見	行動
コンピテンス					
小学5年生(65)	.22	.46 **	.10	.71 **	.59 **
小学6年生(66)	.25 *	.28 **	.03	.70 **	.12
中学1年生(74)	.49 **	.56 **	.33 **	.64 **	.56 **
中学2年生(81)	.43 **	.17	.08	.73 **	.51 **
男性(136)	.34 **	.31 **	.16	.68 **	.33 **
女性(150)	.36 **	.40 **	.12	.73 **	.53 **
平均(286)	.35 **	.36 **	.13 *	.69 **	.43 **
重要度評価					
小学5年生	-.10	.04	.02	.04	-.03
小学6年生	-.09	-.11	-.18	.08	-.01
中学1年生	.23 **	.49 **	.19	.40 **	.30 **
中学2年生	.01	-.13	-.15	-.01	-.10
男性	.00	.10	.01	.20 *	.11
女性	.02	.05	-.05	.03	-.04
平均	.01	.07	-.03	.11	.03

* $p < .05$, ** $p < .01$

表5 自尊感情と重要領域コンピテンス、非重要領域コンピテンスとの相関分析の結果

属性(n) \	重要領域コンピテンス	非重要領域コンピテンス
小学5年生(65)	.23	.20
小学6年生(66)	.43 **	.15
中学1年生(74)	.49 **	-.04
中学2年生(81)	.29 **	.13
男性(136)	.26 **	.07
女性(150)	.44 **	.15
平均(286)	.34 **	.11

** $p < .01$

結果に基づき、以下では、本研究で使用した自己認知尺度の妥当性と信頼性、青年初期における自己認知の発達の傾向、重要度評価の機能の3点について検討する。

1. 自己認知尺度の妥当性と信頼性

コンピテンス下位尺度に対する因子分析の結果から、本研究の対象者はSPPCに想定された学業、友人、運動、外見、行動の5領域のコンピテンスを弁別可能であることが示唆された。さらに、行動領域については否定的表現の2項目によって独立した因子が構成された。このことは、本研究の対象者が行動領域の否定的側面と肯定的側面とを弁別して認知していることを推測させるものである。日本の児童生徒が5領域のコンピテンスを弁別可能であることについては、SPPCを邦訳して使用した先行研究(藤崎, 1999; 前田, 1998)と同様であり、自己に関する特定の領域において、否定的表現と肯定的表現の項目がそれぞれ独立した因子を構成することについても、児童を対象

とした先行研究(中山・西山・柳澤, 2011)によって既に報告がなされている。これらのことから、本研究で使用した自己認知尺度は、概ねSPPCの尺度構成に即したものであり、青年初期における児童生徒の自己認知の構造を一定程度反映するものであることが推察された。

一方で、行動重要度評価得点に注目すると、すべての学年と性において天井効果が認められた。また行動コンピテンス下位尺度項目におけるクロンバックの α 係数もHarter(1985)と比較して低い値を示すことが明らかになった。これらのことは、この領域の解釈には慎重を要すること及び項目の再検討が必要であることを示唆するものと考えられた。

2. 青年初期における自己認知の発達の傾向

本研究における分散分析の結果を発達の観点から解釈するならば、青年初期における自己認知の発達の傾向は次のようにまとめられる。すなわち、青年初期において自尊感情はほとんど変動しないこと、学業コンピテンスは学年進行に伴い低下すること、友人、運動、外見コンピテンスはほとんど変動しないこと、行動コンピテンスは学年進行に伴い上昇すること、学業、友人、運動、行動重要度評価はほとんど変動しないこと、外見重要度評価は学年進行に伴い上昇すること、重要領域コンピテンスはほとんど変動しないこと、非重要領域コンピテンスは学年進行に伴い低下すること、そして、コンピテンスと重要度評価には性差が認められることである。

藤崎(1999)は小学4年生、小学6年生、中学2年生の各学年における追跡調査の結果に基づき、自己認知の発達の傾向を次のように報告している。すなわち、この時期において自尊感情はほとんど変動しないこと、学業、外見コンピテンスは低下し続けること、友人、運動コンピテンスは小学6年生まで低下するが中学生になると低下が止まること、行動コンピテンスはほとんど変動しないこと、友人、行動重要度評価は相対的に高いこと、コンピテンスの領域に徐々に性差が認められるようになることである。

本研究の結果は、対象とした児童生徒の学年、統計的な解釈上の差異により、変動するコンピテンスの領域に若干の相違はあるものの、小学6年生以降の発達の傾向において、縦断的調査に基づく藤崎(1999)と多くの点で共通していた。本研究と藤崎(1999)はどちらもHarterの考え方に即した尺度を使用したものの、調査時期、調査方法、対象者の属性は異なっていた。それにもかかわらず、共通点が多いことは、日本における青年初期の自己認知には、一貫した発達の傾向があることを示唆するものであると考えられた。

3. 重要度評価の機能

自尊感情とコンピテンス、重要度評価との相関分析の結果から、概して自尊感情はコンピテンスと正の関連性があることが示唆された。この結果は先行研究(前田, 1998; 眞栄城, 2005)を支持するものである。一方、自尊感情と重要度評価との相関分析の結果から、概して自尊感情と重要度評価との間には直接的な関連性がほとんどないことが示された。ここで、自尊感情と重要領域コンピテンス、非重要領域コンピテンスとの相関分析の結果に注目すると、小学5年生を除くすべての学年及び性

において自尊感情と重要領域コンピテンスとの間に有意な正の相関関係が認められた。しかしながら、自尊感情と非重要領域コンピテンスとの間には、いずれの学年及び性においても有意な相関関係は認められなかった。

これらのことから、重要度評価は、それ自体が直接的に自尊感情と関連するものではなく、自尊感情とコンピテンスとの関連性を調節する機能があることが推察された。このことは、青年初期における自尊感情の維持・改善において、児童生徒のコンピテンス、すなわち、個人が有能性を認知することだけでなく、重要度評価、すなわち個人の価値観に注目した支援が重要であることを示唆するものである。Harter(1999)は自尊感情の維持・改善に対する認知的支援として、個々の児童生徒に特有の考え方(individual's own theories about the cause of their self-representations)に注目する必要性を指摘している。本研究の結果は、日本の青年初期における児童生徒を対象とした自尊感情支援において、個人の価値観に注目した支援が有効である可能性を示唆するものである。

最後に中学1年生において、自尊感情と重要度評価との関連性が他の学年と異なる様相を示した要因について検討する。青年初期は周知のとおり認知発達が顕著である。この時期に獲得される認知的方略として自己防衛方略(self-protective strategy)がある。これは、ポジティブな個人的特性を自己の中心にあるいは重要性が高い特性とみなし、ネガティブな個人的特性を自己の周辺的あるいは優先順位が低い特性とみなす方略である(Harter, 2012)。つまり、青年初期の児童生徒は自分の得意な領域における重要度評価を高めることが自尊感情の維持・改善に役立つことを認知できるようになるのである。また、青年初期における新たな認知的方略の獲得は、その方略の過剰適用を招く傾向がある(Harter, 2012)。これらのことを勘案するならば、本研究の対象者は、自尊感情と重要領域コンピテンスとの関連性が認められた小学6年生以降、次第に自己防衛方略を獲得し、中学1年生においてこれを過剰適用したことが、自尊感情と重要度評価との関連性における他の学年との顕著な差異を生じさせた要因であると考えられた。

V. 今後の課題

本研究では、横断的調査に基づき青年初期における自己認知の発達の傾向について検討した。その結果、先行研究と多くの点で一致しており、日本における青年初期の自己認知には一貫した発達の傾向があることを示唆する結果が得られた。また、重要度評価については、自尊感情とコンピテンスとの関連性を調節する機能があることを示唆する結果が得られた。これらの知見を疾患や障害がある児童生徒の臨床場面に適用して、対象者の価値観に注目した自尊感情支援の方策と効用について検討していくことが今後の課題である。

付 記

本研究にご協力いただきました児童生徒の皆様、教職員の皆

様に、記して感謝の意を表します。また、本研究は日本学術振興会科学研究費(基盤研究(C), 課題番号・15K04550, 研究代表者・八島猛, 研究期間・2015-2017年度)の補助を受けて実施しました。

文 献

- Eccles, J. S., Adler, T. F., Futterman, R., Goff, S. B., Kaczala, C. M., Meece, J. L., & Midgley, C. (1983). Expectancies, values, and academic behaviors and academic behaviors. In J. T. Spence (Ed.), *Achievement and achievement motivation* (pp. 75-146). San Francisco, CA: W. H. Freeman.
- 藤崎真知代 (1999) 児童期から思春期にかけてのコンピテンスの発達の变化―縦断的資料の分析―. 群馬大学教育実践研究, (16), 311-325.
- Harter, S. (1985). *Manual for the self-perception profile for children*. Denver, CO: University of Denver.
- Harter, S. (1999). *The Construction of the Self: A Developmental*

- Perspective*. New York, NY US: Guilford Press.
- Harter, S. (2012). Emerging self-processes during childhood and adolescence. In M. R. Leary, J. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity* (2nd ed.) (pp. 680-715). New York, NY US: Guilford Press.
- 前田和子 (1998) 日本語版学童用自己概念測定尺度の作成と標準化―Harter モデルの日本への適応―. お茶の水医学雑誌, 46(2), 113-123.
- 眞栄城和美 (2005) 自己評価に関する発達心理学研究. 風間書房.
- 中山勘次郎・西山康春・柳澤登 (2011) 児童用自尊感情尺度の検討. 上越教育大学研究紀要, 30, 63-74.
- 太田真紀 (2007) 吃音児の自尊感情―話す領域に関する自己評価と重要度との関連―. 教育心理学研究, 55(4), 501-513.
- Sharma, S., & Agarwala, S. (2013). Contribution of self-esteem and collective self-esteem in predicting depression. *Psychological Thought*, 6(1), 117-123. Doi:10.5964/psyct.v6i1.50